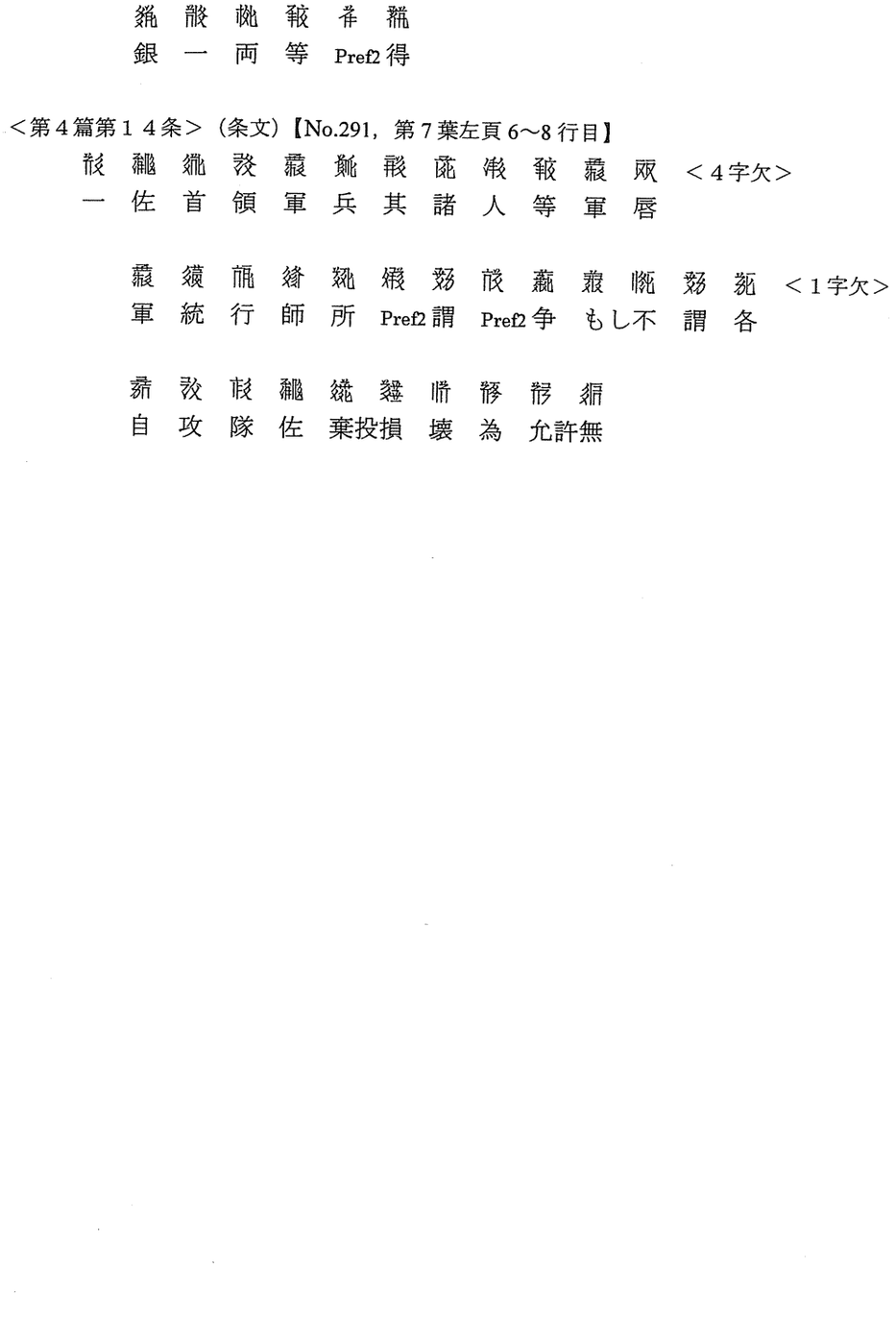


銀 一 両 等 Pref2得

＜第４篇第１４条＞（条文）【No.291，第７葉左頁6～8行目】

一 佐 首 領 軍 兵 其 諸 人 等 軍 唇

軍 統 行 師 所 Pref2謂 Pref2争 もし不 謂 各



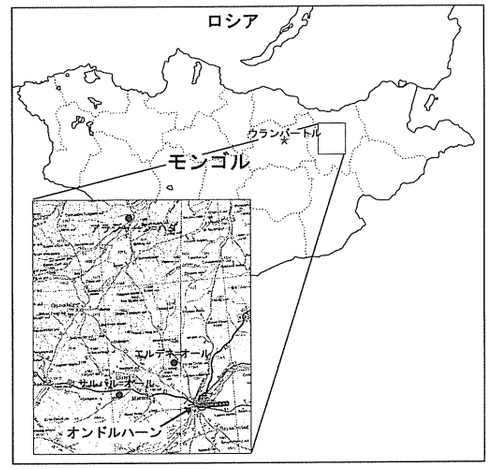
自 攻 隊 佐 棄投損 壊 為 允許無

モンゴル国における契丹文字資料と研究状況（1）

松川　節

はじめに
Ⅰ．サルバル=オール岩壁の大小銘文
Ⅱ．エルデネ=オール岩壁の未解読銘文
Ⅲ．アラシャーン=ハダ岩壁の契丹文字銘文
おわりに

はじめに



1979年，モンゴル国の著名な考古学者ペルレー（Х. Пэрлээ）は，「モンゴルで発見された契丹文字遺物」という論文を著し，1) チン=トルゴイ城址出土屋根瓦に書かれた文字　2) サルバル=オール岩壁の大小銘文　3) ハル=ブフ城址出土屋根瓦に書かれた記号　4) ビンデル山のアラシャーン=ハダ近辺の大石盤に書かれた諸タムガの中の若干片　5) ヘルレン=バルス=ホトⅠの契丹文字碑文　6) サルバル=オール岩壁の大小銘文近辺のタムガの形状について　7) エルデネ=オール岩壁の未解読銘文，以上7件について報告した（Пэрлээ 1979）。これらのうち，本稿では，筆者が現地で確認できた 2) サルバル=オール岩壁の大小銘文と 7) エルデネ=オール岩壁の未解読銘文，さらに，ペルレーは言及していないが，日本・モンゴル共同「ゴルバン・ゴル」計画の 1991 年調査によって明らかにされ，筆者も 2005 年に現認したアラシャーン=ハダ岩壁の契丹文字銘文，以上 3 点を紹介したい。

Ⅰ．サルバル=オール岩壁の大小銘文

この銘文は，19 世紀末のラドローフ探検隊によって「漢文銘文」として写真付きで最初に紹介された（Radloff 1899, plate CXVII-3, CXVII-4）。内容については今まで 4 回にわたって言及されてきた。最初に言及したのは，20 世紀を代表するモンゴル国の言語文献学者の一人，リンチェン（Y. Rinčen）である。

「未知の象形文字銘文」

「ヘンティ県ムネル【ムルン Мөрөн の誤り――松川】郡のサルバル=オール山のビチグトゥ=ハナン岩壁に未知の文字による銘文がある。銘文は縦書きで計 4 行あり，最終行には「某十年五月の日」と書かれている。「日」，「五」，「月」，「十」の字は漢字と似ている。「年」の字は女真文字のそれと似ている。最終行の最初の 2 文字は，契丹か女真の元号である。ビチグトゥ=ハナン岩壁のこの銘文の右側に，古突厥のタムガと，3 つの未知の象形文字がある。優れた満洲学者であり科学委員会会員のバトオチルは，この銘文は契丹文字で書かれていると想定した。興味深いことに，ここから遠くないところに契丹人の 2 つの城址があることに言及しておく。(Rinčen 1958/59: 291, 299)

次に，上掲の 1979 年ペルレー論文では以下のように紹介されている。

「サルバル=オールのビチグトゥ=ハナン岩上の大小銘文」

サルバル=オール山はヘルレン河流域，オンドルハーン市の西方 30 キロに位置する。ヘルレン河流域はモンゴルに所在する契丹の考古遺跡が最も多い地域と言ってよい。その両岸のオンドルハーン付近だけでも，ズーン=ヘレム（皮被河城），バローン=ヘレム，ドード=オラーン=エレグ（契丹）集落，モドン=ジャルガラン=ヘレム，モグノーン（エルデネ=オール）=ヘレム，ホント=ブルデニー=フイス=トルゴイ集落跡がある。これらの城址・集落跡は，サルバル=オール山から 30～60 キロのところにある。

サルバル=オール山のビチグトゥ=ハナン岩付近には，契丹時代の多くの方形墓がある。若干の墓を発掘したところ，10 世紀の青銅鏡，鉄鏃が出土した。

サルバル山のハナン岩の銘文についての情報は，19 世紀末のアカデミー会員ラドロフの『オルホン調査報告』付録の図冊に簡単に附された。モンゴル人民革命の後，科学センターである典籍委員会が設立されるやいなや，当委員会の正委員でサルバル=オール山付近に住んでいた Ts. バトオチルが実見し，書き写した。1940 年代には Ts. ポンツァグノロブが地理学的調査を行い，不十分な書写を将来した。

1952 年 6 月，著者【＝ペルレー】は契丹城址の考古学的調査を主導する際に，当地に至り，銘文を手写し，傍らに刻まれた 16 のタムガを書き取った。その後，チェコスロヴァキアのモンゴル学者プハは，本銘文に関心を持って書き写し，調査記録に含めて公表した。しかし，タムガの形を公表しなかったので，この書写は質の良いものではなかったようである。

1972 年，著者はソ連の考古学者 E. V. シャフクノフと共に当地に至り，銘文を詳しく調査し，書き写し，付近の一つの墓を発掘した。

1975 年，著者は当地で本格的な調査・測量を行った。銘文は大小二つの部分から成る。大銘文は 3 行，17 文字（或いは 18 文字かもしれない），小銘文は 1 行，7 文字である。大銘文は 34 センチ×74 センチの大きさで縦書きに，岩筋に沿って書かれ，行間は 1～3 センチ，4 センチ，5～6 センチと等間

隔でない。文字の大きさは，高さ 7 センチ，3～9 センチ，11～16 センチ，8 センチであり，幅は 3 センチ，8～6 センチ，5 センチ，7～9 センチ，10～16 センチ，陰刻で深さ 15 ミリである。小銘文の行間は大銘文同様である。

大銘文が向かって右側，小銘文は左側に位置する。観察によると，小銘文は大銘文に比し擡頭して年月を記しているように思われる。大銘文の左から 1 行目は 4 文字のみ記されているが，左から 2 行目よりもやや擡頭されており，左から 2 行目は，左から 3 行目よりも擡頭されている。このように 3 段階に擡頭されていることは，モンゴル人の書記が，社会階層に占める地位に応じて，その階位及び命令句を上・中・下から書き出すことによって敬意を細かく区別するしきたりを想起せしめる。以上の擡頭状態より，2 つの銘文の書き出しは左側の銘文にあるように思われる。しかしながら，学者たちが契丹文字を解読したときに，我々の推定の是非が決められるだろう。

さらに言及すべきこととして，サルバル山のビチグトゥ=ハナンの銘文の傍らの岩の平滑面に，16 のタムガが刻まれているのを 1952 年に記録していたが，1972 年，1975 年の調査時には，あるものは風雨に晒されて薄くなり，あるものは剥落して無くなっており，ただひとつのタムガが岩苔の下から明らかになった。これについては別項で述べる。(Пэрлээ 1979: 17-19) [1]

第 3 に，日本・モンゴル共同「ゴルバン・ゴル」計画の 1992 年調査によって，小銘文の内容が解読された。1992 年 6 月 12 日付け『讀賣新聞』は次のように伝えている。

「ゴルバン・ゴル調査隊　契丹碑文を解読　26 字中の 7 字　刻まれた年代判明」

【ヘルレン・トーノキャンプ（モンゴル東部）11 日＝片岡正人】チンギス・ハーンの陵墓を探索する日本とモンゴルのゴルバン・ゴル合同学術調査隊は 11 日までに，ヘンティー県ウンドル・ハーンの近くにある「ハナ・ハダの契丹（きったん）文字碑文」の一部解読に成功した。

解読できたのは，4 行 26 字ある碑文のうち，最後の行の 7 字。「大康十年（1084）五月日」と読め，この碑文が記された年代が明らかになった。1084 年はチンギス・ハーンが少年のころにモンゴルの部族長だったアンバガイ・ハーンの前の部族長ハブル・ハーンが，初めて遼に使者を送った年にあたり，北アジア史の貴重な資料として注目される。

碑文は標高約 1,250 メートルの山の頂上付近にある南西向きの岩壁に刻まれていた。その近くには，遼代の巨大な城郭址（し）ズーン・ヘルム，バルン・ヘルムがある。

この城郭址は，中国の正史「遼史」の「地理志」に，「五百の兵が駐屯していた」と紹介される「皮被河（ピーベーホー）城」と見られているもの。

契丹碑文には，「兵隊」と読み取ることのできる文字もあり，同調査隊日本側隊長の加藤晋平千葉大教授は，「北の脅威に備えるため，防人（さきもり）として派遣された部隊が，記念に刻んだものではないか」と内容を推測している。

---

[1] なお，ダシニャム（編）『モンゴル歴史文化遺物』にカラー写真入りで登録されている本銘文の解説（Дашням 1999: 229-230）は，ペルレー報告と同文である。

第 4 に，2006 年になって，この銘文の解読論文が中国社会科学院民族学與人類学研究所の孫伯君研究員によって公表された（孫伯君 2006）。孫論文は「一、概説」,「二、歴史背景」,「三、銘文釋讀」,「四、結論」の全 4 章からなる。その結論の一部のみを引用すると，

> ヘンティ県の契丹大字銘文が刻まれた歴史背景及び契丹人が紀功を石に刻む習慣に基づけば，これは紀功銘文と推定できる。本論の考証によれば，【右から】1 行目の第 6，第 7 文字は官職「御史都統」であり，その下の数文字は人名に当たる。『遼史』巻 94「耶律那也」伝に「大康中，西北諸部邊を擾すするに，議，往討せんと欲す。帝以為らく，趙三にあらずんば不可と。遂に西北路招討使を拝し，行軍都統を兼ね，これを平らぐ。功を以て復た北院大王と為る」とある。大康年間【西暦 1075～1084 年】に西北路招討使兼行軍都統を任ぜられ，阻卜の叛乱を平定した耶律趙三【＝耶律那也の季父】について，『遼史』は立伝しておらず，その契丹語の名字については史料に記載がない。しかし，その官職と当時の歴史背景より，この人物が当銘文で功を紀された人だと判定できる。
>
> 以上の考証を踏まえ，ヘンティ県契丹大字銘文の前文は以下のように釈読できる：
>
> 山神の暁諭すらく：御史都統の胡特奴（耶律趙三）が軍団を引き連れ，古州において阻卜に勝利した。大康十年五月日。（孫伯君 2006: 52）

孫女史の契丹大字移録は，リンチェンが公表した写真に基づいている（図 1；孫伯君 2006, p.52）。一方，筆者は 2005 年 8 月 23 日，サルバル=オール銘文を現地調査し，銘文の写真撮影並びに採拓を行った[2]。筆者が撮影した写真を図 2 に掲げる。写真からもわかるように，銘文の陰刻部分に墨が入れられており，一見して刻文が見て取れるようになっている。しかしながら，筆者らが採った拓本（図 3）を見ると，実際の刻文は，リンチェンの写真とも，我々の写真とも，かなり異なっていることがわかる。例として，右から 2 行目の最初の文字を比較すると，写真では  だが，拓本では  となっている。拓本に基づく再検討が必要となるであろう。

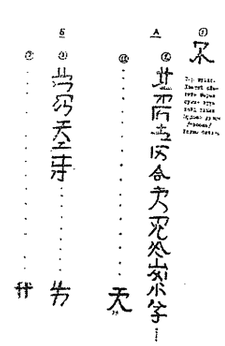
Ⅱ．エルデネ=オール岩壁の未解読銘文

この銘文については，管見の限り，ペルレー以外の報告は無い。ペルレーは以下のように記す。

[2] 調査は，日本=モンゴル共同「ビチェースⅡ」プロジェクトの一環として，科学研究費・基盤研究（B）「内陸アジア諸言語資料の解読によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究」（研究代表者：松田孝一・大阪国際大学教授）の補助金を得て行われた。

エルデネ（=オボーニー）=オール岩壁の未解読銘文

1973 年に我々「ゴルバン=ゴル」考古調査隊は，ヘンティ県ムルン郡の北東郡境にあるエルデネ（=オボー【ニー】）オール山の頂の岩壁に墨書された漢文銘文を手写する際に，その銘文の下側に 2 つの未解読銘文があることを知った。



漢文銘文は若干の文字が薄れていたが，残っている文字を我々の中国学者が解読した。なんらかの人物がエルデネ=オール山に派遣された。漢文銘文を残した人物の名前や年号は無いが，古代遺物を有するこの「洞」（＝岩壁の頂上）に来たった感慨を示したのであり，エルデネ=オール山に古代の遺物（2 つの未解読銘文）があるという情報によって，その中国人はやってきたのだった。

2 つの未解読銘文は，上から下へ墨のようなもので書かれている。岩面には長年の雨によって苔が生しており，解読しにくくなっている。銘文は 2 箇所にあり，ひとつは毎行 1～12/13 文字で 12 行，もうひとつは，毎行 10～11 文字で 7 行と概算した。

岩苔は薄いガラスのように光沢があって，全ての文字形を区別することを困難にしているため，ここでは 12 行銘文【第一銘文とする――松川】の第 1 行の（冒頭の）1 文字，第 2 行の 12 文字（この行には計 13 文字あるが，一文字は全く見えない），12 行目の最後の 1 文字をそれぞれ模写した。我々は二日間辛抱強く作業し，これら 2 つの銘文に 40 以上の文字があることを確認した。

2 つの銘文が共に右から左に行送りされていると考えたのは，【第一銘文の】最初の行の一文字のみが擡頭されているからである。

これらの銘文について，わが国の研究者たちは，いずれにしても漢字ではなく，契丹文字の可能性があるとしている。それゆえ，この論文に含めたわけである。（Пэрлээ 1979: 21-22）

筆者は 2005 年 8 月 20 日，エルデネ=オール銘文を現地調査し，銘文の写真撮影を行った。筆者が撮影した第一銘文の写真を図 4 に掲げる。なお，第二銘文（計 7 行）については，目視では 6 行分しか確認できず，写真にもほとんど写らなかったため，ここでは措いておきたい。

Ⅲ．アラシャーン=ハダ岩壁の契丹文字銘文

この銘文については，日本・モンゴル共同「ゴルバン・ゴル」計画の 1991 年調査によって，年号部分が解読された。1991 年 8 月 2 日付け『讀賣新聞』は次のように伝えている。

◆「大明皇帝着來」　墨書発見の奇岩ビッシリ

「大明皇帝着來」――。チンギス・ハーンの生まれ故郷，モンゴル北東部，オノン川流域の大草原を見下ろすビンデル山の奇岩，アラシャン・ハダの岩面に記された墨書の発見は，ハーンの陵墓を探索する今年度のゴルバン・ゴル計画の最大の成果だった。墨書は明の永楽帝の「オノン河畔の戦い」を考古資料から実証しただけではない。岩面に残されたさまざまな種類の文字とともに，多くの民族が興亡を繰り返した北アジア史解明の重要資料であり，その中にチンギス・ハーンの陵墓のナゾを解くカギが潜んでいる可能性も高い。（ウランバートルで矢沢高太郎，写真・青木久雄）

【中略】また，契丹族が建てた遼の北モンゴルへの進出を示す「天重熙（じゅうき）四年九月十五日□」の契丹文字も重要な発見だった。遼の年号，重熙四年は1035年，契丹がモンゴルへの進出を繰り返していた第7代興宗の時代。「遼史・地理史【志】」には次のような記述がある。

「皮被（ひひ）河城北辺を控え，兵五百の防戍（ぼうじゅ）を置く。皮被河回紇（ウイグル）の北を出で，東南に羽厥（うけつ）を経て臚朐河に入る」

皮被河城とは，アラシャン・ハダから南東へ約百七十キロの町，ウンドラハーンの近くに遺跡として残る遼の城，ズーン・ヘレムのこと。臚朐河は，ゴルバン・ゴル計画の昨年度の調査地域だったヘルレン川を指している。この墨書もまた，「遼史」の記述に見られる当時の政治状況を裏付ける重要な考古資料となった。

この銘文は計11行の墨書で，契丹大字で書かれている。その一番右の第1行が，上記『讀賣新聞』において加藤晋平氏が解読した「天重熙四年九月十五日□」である。なお，第8行の上方にウイグル文字モンゴル語の墨書1行が，契丹文字と重なるように記されていることを筆者は別稿で公表している（松田・村岡・松川2006: 81-82）。

筆者は2005年8月21日，この銘文を現地調査し，写真撮影を行った。筆者が撮影した写真を図5に掲げる。

おわりに

本稿では，モンゴル国内に現存する契丹文字資料のうち，筆者が現認できたものに限って紹介した。このほか，ペルレーが言及している 1) チン=トルゴイ城址出土屋根瓦に書かれた文字，3) ハル=ブフ城址出土屋根瓦に書かれた記号，4) ビンデル山のアラシャーン=ハダ近辺の大石盤に書かれた諸タムガの中の若干片　5) ヘルレン=バルス=ホトIの契丹文字碑文　6) サルバル=オール岩壁の大小銘文近辺のタムガ，以上5点について，また，モンゴル国における契丹文字資料の解読研究の状況などについては，続稿で扱いたい。

参照文献

Дашням, Л.（1999）*Монгол нутаг дахь түүх соёлын дурсгал.* Улаанбаатар.

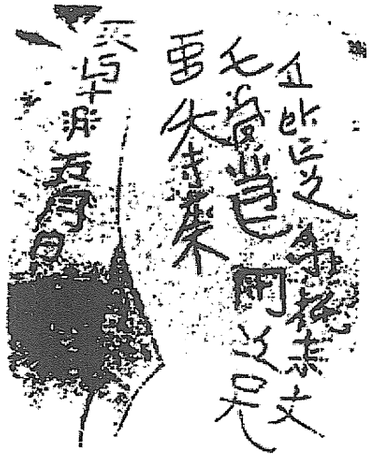
松田孝一・村岡倫・松川節（2006）「ヘンティ県アラシャン・ハダの墨書について」『日本モンゴル学会紀要』36: 77-82, -4 pls.

Пэрлээ, Х.（1979）“Киданчуудын бичгийн дурсгал монголоос олдсон нь”, *Хэл зохиол судлал* 13.3: 15-30, -7 pls.

Radloff, W.（1899）*Atlas der Alterthümer der Mongolei.* IV. St. Petersburg.

Rinčen, Yöngsiyebu (1958/59) “Les inscriptions inconnues sur pierre et les plaques d’or ornamentées du harnais de tonyoucouc”, *Central Asiatic Journal* 4: 289-299, -7 pls.

孫伯君（2006）「蒙古国肯特省契丹大字刻石考釋」『世界民族』2006.4: 44-52, -1 pl.



一　丘即に之承花来文
二　毛崗豈用之兄
三　雷拳奏
四　天马十将五月日

図1



図2

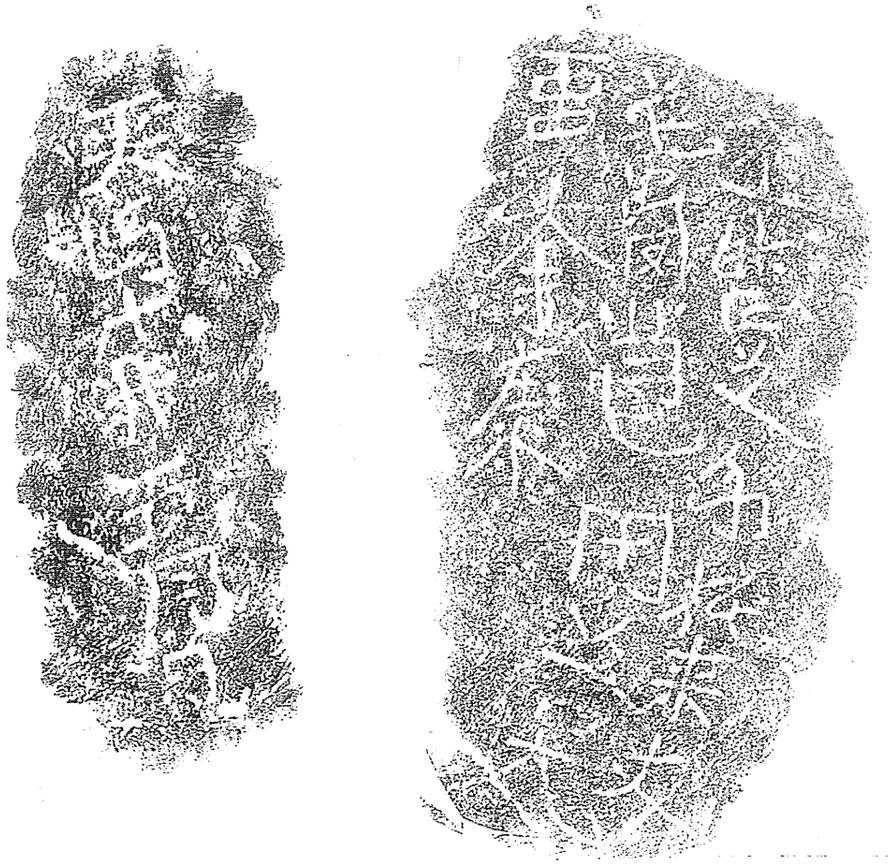


図３



図４



図５

遼金西夏研究の現在（１）

2008（平成 20）年６月 30 日
編者　荒川慎太郎・高井康典行・渡辺健哉
発行　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534　東京都府中市朝日町３－11－１　TEL:042-330-5600
印刷　日本ルート印刷出版株式会社
ISBN978-4-87297-995-4